

蘆花日記
四

大正五年十二月
— 大正六年五月

筑摩書房

蘆花日記 四

昭和六十年十二月二十五日初版第一刷発行

定価四五〇〇円

著者 徳富蘆花

監修者 中野好一夫

校注者 吉田正信

発行者 布川角左衛門

発行者 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—一九一

電話 東京(四)七六五—(営業)

東京(四)六七—(編集)

振替 東京 六一四—二二三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替致しませ

目 次

解題
索引

大正五年十二月一日	三
大正六年一月一日	一〇一
二月一日	一五
三月一日	二五
四月一日	三四〇
四月二十七日 (伊香保日記)	四三
五月一日	四六

五〇七
五〇九

大正五年

(十二月一日
十二月三十一日)

○十二月一日（金）晴 霜と氷

先月廿四日に匹敵すべき霜と氷だ。斯くして冬になるのだ。

越路〔三世竹本越路太夫〕の義太夫が聞きたくなり、桜井〔春代。お手〕を買物かたがた新宿へやつて歌舞伎座に電話をかけさせる。

次いでに、風俗画〔えまき〕巻第二期六回分拾八円、右送料壹円〇八錢を振替で払込む。本草図譜〔江戸時代後期の本草学者岩崎常正の著〕の十二月分送料共弍円五拾八錢も同断。

日課〔大正二年秋の旅行の記録。のちの「死の隣に」の執筆〕。まだ京城だ。妓生〔おせん〕買ひ（日は買の意味が肉を意味するからいけないと云ふ。俺も妓生の肉が欲しいのだからうから、肉と云ふたのである）の記だ。

人間の交渉に精密な計算が中々分かるものでない。神は毫厘〔ごうり〕の微まで知つて居る。如何に払つたり戻したりしたつて、clear off が出来るものではない。

受けないか——然らざれば感謝して受けべきだ。

其事から昼飯に大久保〔貞次郎。実姉音羽子の夫〕の布哇〔ハワイ〕行きの三等を取らず、青山〔兄蘇峰猪一郎を指す。蘇峰宅は東京市赤坂区青山南町六丁目にあつた〕の添書で二等に移してもらふて、其世話をした男に□□の札を言ふたまづさを指摘する。

桜井が帰つて来た。今日は猪肉を買ふた。俺は「猪」肉が好きだ。妙に「猪」肉が好きだ。久栄〔山本久栄。蘆花の初恋の女性。性新島義の妻の姪。明治二十六年死去〕の恋以前に俺は「猪」に恋して居た。それは即ち母に対する父の愛——酬〔むく〕はれざる——であつた。「猪」はうまい。然し脂強いから、やたらに食ふと却て「猪」に喰はれる。不消化になり易いからな。

俺は猪が好きで、併せて蜜柑が大好きだ。蜜柑と猪は合食〔あひく〕へ都合〔あつ〕だから面白い。

●肥柄〔こやしけ〕杓〔しやく〕が通運で届いた。此は梅〔おきん〕が余程前に新町で聞いてなかつたので、頼むともよすとはつきり云はなかつたものだ。mは玉〔鈴木玉。お手伝いさん〕が先日断はらなかつたのがいけぬ、と曰ふ。

巡査が戸籍調べに来了。今多用と云ふてみつ〔湯浅みつ。お手伝いさん〕が自身の原籍を言ふたきり、玉なんかは旦那御飯中だから後に来てもらふことにした。俺は巡査さんが恐いに、みつは巡査より旦那が恐いのだ。五十位の巡公だつたさうだ。

サク〔元のお手〕が居るかなど聞いたさうだ。サクが去つたのは、一昨年の春だ。そこで三年ぶりに戸籍調べがあるわけだ。千一歳一村なるかな。ヨ曰く、みの〔元のお手〕なんか戸籍に入らずにしまつた。

日課を十一時に切り上げ、それから髻を剃る。中四日で、大分のびて居る。鼻の下なんか真白だ、とヨ曰ふ。立てたら白髭で衰すいたるものであらう。では六十までは剃ることにしやう、と余曰ふ。娘に惚おぼれられたい。若い娘に愛され慕ほはれたい。然し余も来年は五十だ。

昼飯に、ヨ曰く、私も大分年が寄りました、珍らしい外出にも御飯が食べられる。入浴。

●桜井を義太夫聞きに連れて行くと云ふたら、心からの喜を溢あらして、「嬉しい」と云ふた。「おとなしく地図をかけた御褒美だよ、〔C〕と余曰ふ。

みつも連れて往く筈だったが、みつは留守させたがよい、とヨ曰ふ。

玉が奥に来る。余曰く、どうか、嬉しさうに見えるかい。玉、余の顔を見る。然と曰ふ。余曰く、旦那もよく御勉強だつたから、ちつとは御褒美がなくなちや。

●今、玉がW・Cを拭きつゝある。今、mが去つた。mと余と亀の話をするのを聞いて居て、玉が笑ふ。余の陽物が熱して来る。(二日、午後二時前五分)

玉を抱きたいが、我慢して唯背をさらりと一つ軽く撫なでる。やがて玉去る。

ヨが鈴を鳴らして玉を呼ぶ。余曰く、腰元と云ふものは腰の元に居なければ駄目。玉、ヨの帯をきゆつきゆつとしめる。余に大鳴の二枚重ねを羽織らす。あとは旦那遠慮して一人で着る。

●玉がmの襟巻を旦那のと思ふて居た。

二時前に出門。余が東京に往つたは四月十七日、夫婦で玉を連れて帝劇に往つた以来だ。其後玉川へは往つたが、東京には中七ヶ月一度も足踏みしなかつた。「穴熊」が穴を出るのだ。矢張嬉しい気もちがする。

●門でノドの郵便屋に逢ふ。何もない。靈南阪教会〔赤坂区にあつた組合教会派の教会、牧師は小崎弘道〕から手紙のみ。

塩鉄〔塩谷の住人〕の横を通り過ぎるまで、みつ、玉、梅が見送つて居たさうだ。まだ雨や霜のあと路が悪い。伊左〔伊左衛門・梅〕の家をよけて中路を通る。久しぶりに延さん〔本橋延吉〕に会ふ。延さんも年寄つた。それから塩鉄の畑に下りると、林〔塩田林蔵、鉄五郎の息子〕が菜を洗ふて居る。帽をとつて赤くなつた。可哀想にも可愛くも思ふ。「我豈に爾を愛せざらんや」と心に叫ぶ。「菜つ葉がよく出来たね」と声をかけて過ぎる。直ぐ傍で菜を積んで居る男の一人は元〔塩田元吉、鉄五郎の嗣子〕らしく思ふたが、「今日は」とかけた言葉に対し、生返辞して顔も上げなかつた。停留所で一寸待つ。電車の新宿発終電は夜の十時ださうだ。麦がひよいひよい緑に芽を吐いて居る。昨年麦二寸から熟麦まで病院通ひした事を思ふ。日の隣に股引の男がかけるから、日、桜井を呼ぶ。桜井解せず。昔の日も其通り無邪氣だつた。

電車が来た。荷物の多い、子を抱いたおかみ。松沢から乗つた白髭金眼鏡の紳士。おかみに「おまへ、おまへ」と云ふ。干大根。改正橋に湯浅〔治郎一家、姉初子の婿家、代々幡町代々木初台に居住〕の誰の影もなかつた。追分のいもやはさびれて居ると日が曰ふ。

市内電車。五十回券なし。園〔元のお手〕に肖た丸髻の女。先刻の金縁老人を想起し、「老人は心細いから余計に我を張る」と余曰ふ。

●跡見女学校。

三時半頃歌舞伎座着。角蔵案内。高土間の南から二。改築修繕〔明治四十四年、日〕後の歌舞伎座にはじめて来る。あまり好い舞台ではない。一枿買切る。日、桜井と運動場を見る。八分位の入り。越路一座は摂津〔竹本摂津大嬢、明治期の名人〕の脈を伝へて、繊巧な技巧が多過ぎる。菊五郎〔五代目〕と云ふところだ。源〔竹本源、太夫〕の玉三〔義太夫節「玉藻前」、三段目の略称〕一寸好い。桜井が先頃一寸其一節を語つたから、日、「春代さんより少し上手」と云ふ。

●源のでm泣く。

余り美しい娘も居ない。牛の様に太つた男が多い。俺も其一人だ。(日曰く、外套を召すと瘡せて見える。桜井同ずる。余曰く、見合ひには外套を着て往かう) 肉的の太つた体を見るといやになる。無情慾むせきよも強からうなど思ふ。俺はまた菜食して瘡せやうか、など思ふ。

津太夫〔三世竹本〕の沼津〔義太夫節〕伊賀越道〕中双六〕の六段目〕は一寸泣かせた。磨いたら名人にもならう、と余曰ふ。昔よく聞いた津賀太夫に肖て居る。日は先年大阪で、丁稚の長松をやつた男の様だと云ふ。

南部〔三世竹本〕の老徳〔南部太夫〕、病後と云ふ条氣の毒でならぬ。南部の Record を日〔義太夫節〕が好くから余は嫌ひだが、眼の前にあの消え行く影法師を見るとあはれでならぬ。役者は如何でもなるが、義太夫は体格が衰へては駄目だ。それでも老練で漸く短所を護して行くが、声がさつぱり駄目だ。終つたら、ほつとした。南部の影は薄い。重〔義太夫節〕の井子別れ〔義太夫節〕の十段目〔義太夫節〕は此歌舞伎座で彼が師撰津が語つたのを余も細君と共に聞いた。撰津は老ひて、今は南部が其重の井を語るが、彼も最早駄目だ。近松〔衛門〕は矢張名人だ。三吉〔重の井〕は生きて居る。重の井は駄目だ。(女が私情を後にして義理に生くる様になれば女でない)と余曰ふ。越路も其時は若く、びつくりする程大音であつたが、三竿の竹を描いた広業〔寺崎〕の衝立の横に現はれた彼は髪が白い。堀川の鳥辺山〔浄瑠璃〕近頃河原達引〕の堀川の段〕は呂昇〔豊竹呂昇〕の方が好い。最初は越路も声が悪かつたが、段々名調子になつた。矢張技巧が過ぎる。然し巧いは巧い。それから猿廻はし〔義太夫節〕近頃河原達〕の中の巻の切場〕の三味は実に好くて、吾を忘れる処が可なりあつたが、矢張織巧に過ぎる。語る太夫も、日の云ふ如く歌沢〔歌沢節〕三味〕のすまし様でも困るが、ちと活動過ぎ、実感すぎ、写実過ぎる。芸事は矢張表皮と実の間の薄皮に妙味がある。目出たやねえツ」と大音を張り上げて、昔の越路を思はせた。蛮氣稚氣が頼もしい。〃きりきり此家を〃で皆が立ちかける。日が憤慨して、お叱りなさい」と余に囁く。余も苦々しくは思ふが、日の使嗽しそくで立上つて叫ぶ気にもなれぬ。自発でなければ駄目だ。

角蔵にいくらやらうかと思ふ。式円やる。成金時代でも、さう無暗に金をやる人もなさうだ。竹葉〔京橋区新富町〕の有名な酸屋〕の鰻〔古頼太夫〕を古頼〔三世豊竹〕の引窓〔義太夫節〕双蝶々曲〕の時喰ふ。

十一時に歌舞伎座を出る。新宿、甲州街道と例の順路を取る。自動車で病院を出た時の事など思ふ。車掌が段々ゾンザイな口を利く。『右? 左?』なんか云ふ。田舎を軽蔑するのだ。

廻沢めぐりざわの口に下りる。『煙草屋?』なんか車掌が曰ふ。賃五円八十銭、沓円二十銭増してやつたら、少し尊敬を恢復したやうだった。

提灯なく、下駄を日ははかず、暗い悪い路を桜井先に用心して行く。空は星だらけだ。歩いて帰つた時など思ふ。桜井は大阪で自動車に乗りたかつたが、先生があまり高いと云ふて乗らなかつた、と云ふて、自動車に乗つたと友達に云ふてやると喜んだ。(歌舞伎座で、『また芝居に連れて来てやるよ』と余が曰ふた。日が一人ばかりはいけなからと誤解を訂正した)自家の外まわりは可なり広い。犬でも居ると吠えて出るのだが、と云ふ。

家に帰ると十二時十五分過ぎ。入浴はよし、冷たい乳と熱い茶を飲み、日が皆に買つて来た団子を少し喰べて奥に退く。

自動車の音が聞こえたら提灯つけて迎へに来て、とみつを不足に思ふたが、思ひかへすと用心して出ぬが尚好いだ。

奥に退き、今夜から毛布を敷いて寝る。而してまた発情して、『ボウ』『オマンコ』『マラ』『おさせ』など云ひつゝ、快々地に交合した。背面斜面交合。マラが大きい。愉快も多い。

○十二月二日(土) 微雨

Tired but happy.

日課。やつと京城が後になつた。

良八〔原田良八。妻〕が群山〔朝鮮全羅北道第一の都市。良八がいた〕に寄つて呉れの電報を余にかけず青山にかけけることを回想する。昼飯に日に話す。良八も馬鹿だが、然し明治廿八年正月の事〔妻愛子の両親と異母兄がチフスで倒れたとき、愛子の帰郷をめぐる良八との間の一悶着〕もあるし、鶴子〔蘇峰の六女。明治四十二年九月二十八日から大正

三年五月二十一日)を養ふたりして居ては、良八がまだ兄頼みと余を思ふも当然だ。俺が矢張悪いのだ。幼稚だったのだ。誰を恨むことも出来ぬ。良八も馬鹿、日も馬鹿、俺は大馬鹿——と次第に熱して曰ふ。

世間ではとくに余の独立を認めて居ながら、余自身はまだ中々一寸離れ得ぬ。遠慮もあれば、不知不識信頼もある。一人前になつて居なかつたのだ。低能、不精、幼稚なのだ。自己がしつかりして居ないのだ。そのくせ世間は立派に對立させて居る。唯昔を知る者、近まわりの者が矢張昔の健次郎さん扱ひをするのだ。

然し悔恨する事はない。All for best。大急ぎで独立する要はない。瓜熟すれば自然に落^たちるのだ。

拘泥がとれ、心の欲する所に従ふて行動する様になれば、戦ふも和するも障礙はない。Fair play が出来る。

●書齋で、何でも十分にすればよい、ブラでも存分にすれば疲れても sweet languor を感ずる(十分に戦へば死んで往生する)と曰ふたら、mが逃げ去つた。

俺は常に自分を最低に置いて居た。然し最低から出発して、漸次高処に上るのは好い。動物から俺ははじめた(人間は皆然だが)。人は他の言ふ事を聞くが、俺は頑愚で、自分の実験を経なければ信せぬ、満足せぬ。だから廻り道が多い。然しそれは無駄ではない。確実に一歩づつ築き上げて行く強味がある。他に代つて十字架も負ふ。First hand に於ての智識を獲る。血汗涙で購ふた智識だ。だから過去一切は皆非常なる天恵だ。俺はすぐれて恵まれた者だ。即ち神の愛子だ。

(m、大に吾心を得たりと云ふ顔をする。)

俺は母がなかつた。だから母を要求した。日^Bは出来た人間と思ふたから、色々要求した。可愛がるよりも可愛がられやうとした。彼の通りの何も出来て居ないガランと知つたら単に可愛がつてやる筈だった。だから最初の十年に母とし、次ぎの十年を Engage の時とすれば、今が新婚で而してこれから可愛がつてやるのだ。俺は十一円、日^Bは拾貳円の月給で、俺より壹円だけエラかつたのだ。(斯く云ふと玉笑ふ)。

午前に大江〔保吉。大江書房主人〕に手紙を出した。其内に「越路は浪六〔村上浪六。大衆作家〕の友人ださうだ。此前見た時より頭髮が著しく白くなつて居るに驚いた。彼の芸は余程妙境に入つたが、まだまだ前途がある、彼には幾分の奮気稚氣がある、それが彼の望だ。人間はさつさと仕事をしまつてさつさとお暇乞をするでは駄目だ。根よく、氣永く、倦まず、撓まず、十分に、存分に生の盃を余瀝をあまさず飲み乾したいものだ。お互にせつからだから、注意しやう。」

書目を「死の方へ」とあらためた事も言ふてやる。大正二年十月の女学世界〔博文館発行の婦人雑誌〕は、粕谷訪問記〔武蔵野と風姿活。十一月号に掲載〕を小僧に写さしてよこせ、と云ふてやる。

桜井、余程昨日は急いだと見え、振替の受取を忘れて、局から送つて来た。

秋田県の小学校校長から書を求めて来た。彼辺では漢字が盛んだ。トル〔トリス〕に関して詩を余にくれたお医者のお話を日にする。乃木さん〔典〕に「敵中亦有好軍人——易地皆以忠一耳、紫髯緑眼有張巡」を送つたも彼だ。詩も出来ず、歌俳も出来なかつたから彼に返事をしなかつた。芸が出来ねば駄目だ。日曰ふ、文雅の交際はわるくない、趣味の交際は。又曰く、彼方は後れて居るから、まだ漢学の時代で、それが漢学復興の時に丁度ぶつかつたのです。明治天皇の曰く、皇后も事理を解して居る。

亭主毎々お鼻に一目置き玉ふ。

白木屋お駒〔義太夫節「恋娘音」の八丈に出る娘〕の亭主殺して、余は神近〔市子。前月、恋のもつ〕を思ひ出したが、日もと曰ふ。日曰く、彼は金問題が重な様でいやだ。余曰く、現代は生活背景だ、見追してはならぬ大切な場合だ、生活は自我だ、自我の発現としての情事だから不快になるのだ、昔のは情緒本位だ、それだけの差がある。

日、大に感心する。

ところが全くの嘘ではないが、まだ研究の余地がある。

余等は昔者で、兎角金を軽蔑する、これはよくない（先日藤本のぶが逗子の山で、路を教えた子供に二三錢をやり渡る日ケチと思ふた事を話した、馬鹿のぶなんかは俺等の心が分からんのだ）。

それから現代人は自然に demo [demo] と自由で、階級や職業で必しも別を立てない、我等には余程覚悟して其一圈を破らねば平等に達せぬ。そこに時代の差がある。それだけ此方は年が寄つたわけだ。然しそれにはその興味意味がある。何の境地も皆好い。要するに妥協胡麻化し不徹底がいかに、存分に出すのだ。

楓落ちて、園中裸の樹が多い。而してそれは絢爛すんたんの秋より好い位。樅堂山人原田弥平次「妻憂子の父」ではないが、枯木の景が好い。曰く、枯木の景云々で父の趣味が分かつた位でした。余曰く、存分にする事だ、青春は春、夏、秋、冬——其何れも十分に自己を出し切るのて好い。

●疵、無疵について話す。客観的には無疵なものはない。また疵が一番の榮になることもある。

これより先き飯の時、曰の曰く、今の様だと大きに樂です、昔は窮屈で、唯癩へ癩、癩の時だけ眞実が出た、だから癩へ癩、癩が愉快な位だった。今じや癩へ癩、癩が地か、——旦那がイライラして居ると思ふて、玉、こわがるな、これでも中々可愛がるよ。曰く、どうして御機嫌をとるといふか、それはニコニコして居ること。余が避雷鍼ひらいしんを云々したからである。

曰く、あなたはやつと若くおんななすつた。余曰く、生理は小春、氣は子供。——長生しなければ駄目だ。

お貞叔母河瀬貞子。母「久子の末妹」の羽織を着て夕方出る。昨日の霜でカンナも何もぐたりだ。忽ち眞の冬景になつて了ふた。北畑に出る。梅が小松菜をとりに来る。何しに？ とときく。中々返事をしないのが彼女のくせだ。羽織は如何だ、ときく。よく似合ふ、と梅曰ふ。俺は玉に多少遠慮するが、梅には大びらにふざけ、今朝も羽織を打被せたりした。双肩を押へたりしたこともある。然し desire があつての事ではない。それよりも玉が今日午後 W. C. を掃除したりする

時は、血が少し熱する。玉も桜井の競争で大分心を入れて居る。掃除も丁寧にする。ポつこりの音が子供らしくて好い。的を持つて来たが弓はよしした。丁寧に庭先を掃いたりする。情をやゝ含んだ眼で、W.C. から見たりした。丁度日記を書いて居て、「猪」肉の条で嘖き出したら、玉が外で答笑した。「玉の事ぢやない」と笑つて正す。

梅も真的の変態、玉も薄弱で我強く俺に肖、桜井もみつも多少の低能か変能かだ。主婦を院長にした粕谷病院だ。俺も勿論病人だ。狂と呼ばれ痴と呼ばれる男だ。——此病院を病院と思ふ者はあるまい。

桜井は、父母にも斯様に可愛がられた事はない、と昨日のよるこびを云ふたさうだ。此方で与へられないものを、彼方で与へられる。造物のやりくちはうまいものだ、と余曰ふ。余等に子が無いのも、無意味ではない。

●昨夜、南部のまづい声に皆が弥次らなかつたは、幾分江戸ッ児の義侠心を現はす、と余曰ふ。mは南部にそれだけの妙所があるのである、と云ふ。共に一理。mが南部の「寺子屋」〔義太夫節「菅原伝授手習鑑」の四段目の切場〕のレコードに弾かれるのが余はいやだ。それから鹿子木の婆さん〔ウタ。熊〕を今夜も云ひ出して、野崎〔義太夫節「新版歌祭文」上の巻中の「野崎村」〕のあの節を昨夜もドンブリコの段で低く弾いて居たと云ふ。少し不快になる。歌舞伎座がいつか来た時よりも變つて居る、と云ふたのが、阿部充家〔国民新聞社副社長 兼 京城日報社社長〕を思出させて、余に不快を与へた。不快の二対。

●芝居の出方にやつた心附の事から、mの曰く、あなたのは最終のやり方で、つまり経済なのです。無論目前には損です。

●昼飯の梨が今日ほうまい。これなら礼のはがき位はやつてもいゝと云ふ。m、矢張り心の入つたものは違ふと云ふ。だが、若い者に惚れられるのは面倒だ、と余云ふ。「玉」の様な若い娘でも真剣に惚れたら、迷惑するかも知れぬ——ルヂン〔ツルゲエネフの同名の小説の主人公、余計者〕の様に。梨の事からお文〔石川六郎の後妻〕の話が出、「俺はお文が好きだつた」と云ふ。彼女も先生を崇拜したが、然し主人を有つたらもう駄目だ。遠ざけるのが当然だ。平作ではないが、他にやつた者の心を引張り？は駄目だ。俺が感情は大抵違はない。あれも青山に依頼心が残つて居た間違ひだ。お文をmの曰ふまゝに石川

〔六郎：国民新聞記者〕にやつたのが、——然し河田お春〔姪。精一〕の名残りがあから。要するに一切が運ばるべき順序に運ばれたのだ。鶴は返へし、お文は遠ざけた。潔癖だが、此様の男はこれで行くより仕方はない。安心がつかぬのだ。

●午餐の時余曰く、mは病院に往つて、つまり一度死んだのだ、それを迎え取つたから（父が迎えたのでも、兄が司式したのでも、人見〔太郎。麻花の結婚話の仲立役。民友社初期の社長秘書兼業務主任〕が媒妁したのでもなく、）全く余が親迎したのだ。

●崇拜がうるさい、では女学教師も同様とm曰ふ。全くだ、死んだトヨも同然だ、うるさいから愛想づかしばかり云ふたりしたりする。でも中々つかされぬから困る。つかされたら、また困るだらう。

●売れた本の筆頭が青山の「大正の青年云々」〔十月刊行の「大正の」だ。秤の上下が面白い。小説では長田幹彦〔当時、谷崎潤一郎とならぶ代表作家〕。何とかが一万八千。「虚栄」が時事に出たら本屋が二十八軒押かけたとき。そろそろ落ち目の流行児が、上る流行児を今日の前に見るのも一寸面白い心地。

夕飯には猪がうまい。但肉が軟らか過ぎる。羽織を聞く。玉も桜井も好いと云はぬ。梅はほめた、お茶の水の子もほめた、と余曰ふ。曰ふ、田舎のおとつさんのやうで、好くない。これはお貞叔母が近い頃の手織か知ら。榻の上から平気に見下ろす典次さん〔河瀬典次、貞子の夫〕の油画の話をする。曰皆に曰く、余程女がしつかりせねば男は何をするかも知れぬ。

今日は午前に入浴したから、即ち昨日のに入浴したから夜は入らない。

桜井が足を撫でる。玉が日の髪を解きつゝ、しばしば解き直させられる。

桜井、みつは入浴。其前に「おぐしを解きましやうか」の挨拶の練習があつた後、日の髪を解きはじめて玉はまだ解き終へぬ。曰く、何をそんなに急ぐ？

旦那の足を摩でん為に、——と余は心の内に謂ふたが、これは旦那のウヌ惚れた。然し日のいらいらは余の胸中に通じた。

昨夜の事から義太夫熱が起り、夫婦で色々唸る。桜井とみつに余の足を摩でさせつゝ。玉が上つて来た。玉に右の足